

論 説

戦後胡適の自由主義 ——「協力の中の反抗」に着目して——

劉 承衛

はじめに

第1項 「独立知識人」から親国民党知識人に

第2節 民主化改革と自由の促進に向けて

第3節 「協力の中の反抗」の限界と意義

おわりに

(要約)

本稿は、戦後胡適の自由主義を「協力の中の反抗」という視点から再評価することを目的とする。「独裁と戦うか否か」という従来の研究の二元的な視点でなく、「独裁政治の下で多様な形で活動した知識人の在り方」を探る本稿は、「蒋介石政権に協力する立場を維持しつつ、その統治に異議を唱える」という胡適の政治的姿勢を「協力の中の反抗」と定義し、この視点に基づいて胡適の自由主義思想を分析し、その実践の限界と意義を明らかにした。本稿が描く胡適は、単なる独裁政権の従属者ではなく、政権内から自由と民主を追求した複雑な知識人である。体制内改革という胡適の試みは彼の生前では成功には至らなかったが、「静かな革命」と呼ばれる台湾民主化の過程は、胡適の構想は現実的に実現可能であることを示した。この点において、本稿は胡適を体制内改革の先駆者として位置づけることができると示唆した。

はじめに

本稿は、第二次世界大戦の終戦前後から胡適が逝去する1962年までの時期を対象とし、胡適の生前における実践を「協力の中の反抗」という視点から分析し、戦後胡適の自由主義を再検討することを目的とする¹。

胡適(1891-1962)は中華民国の著名な知識人であり、自由主義と実用主義を掲げ、学者、思想家、外交官として活動した。彼は文化、学術、社会、政治、外交など多方面にわたり影響を及ぼし、近代中国及び戦後台湾に大きな足跡を残した。1949年から1958年の胡適は主に米国で活動し、この間に三度台湾を訪問した。その後、中央研究院院長に就任するため、1958年に台湾へ定住し、1962年に同地で逝去した。

先駆的な胡適研究として挙げられるのはグリーダー(2018)である²。同研究では1937年以降の胡適を「台湾で最も注目を集める思想的に誇りとなる人物であり、五四世代の中で最も威望のある生き残り」と評する一方で、多くの期間において、その名声にもかかわらず、彼は周縁的な存在であったと論じている³。しかし、グリーダー研究は胡適の影響力を過小評価しているように見受けられる。また、同研究は分析の重心を中国大陆期の胡適に置いており、台湾史の視点から胡適を十分に分析したとは言い難い。

確かに胡適は中国の知識人であるが、制憲国民大会⁴、大陸陥落、中華民国の台湾移転、『自由中国』⁵、蒋介石の総統三選、反対党結成運動、雷震逮捕など、現代台湾を形作った戦後の出来事

の全てに胡適の姿が見られる。更に、終始自由主義者を自任し、一貫して反共の立場をとった胡適は、戦後台湾での自由主義という政治思想史的な文脈においても、決して看過すべき人物ではないと筆者は考える。

胡適生誕百年にあたる1990年に開催された「胡適と近代中国」国際学術会議において、当時の中華圏の学者たちの間での胡適の評価はおおむね確定されたとされる。同会議によれば、胡適思想の学術的意義は既に「前時代的」になったものの、晩年の言葉である「容忍は自由より重要である」は⁶、中国と台湾にとって未だに政治的意義を持つと評価された⁷。また、周（2013）もこれに類似した見解を示している⁸。

しかし、この「政治的意義」とは具体的に何を意味するのか。胡適の思想において政治的意義を持つのは、果たして「容忍は自由より重要である」だけなのか。これらの問いに対して、同会議も周も明確な結論を示していない。

その後、陳（1991）、陳（2013）、江（2018）、金（2023）など、胡適を批判的に論じた研究が増加した⁹。これらの研究の分析の視点と強調点は異なるものの、「胡適は蒋介石に従属し、牽制され、独裁政権と戦わず、自由主義者としての実績を残さなかった」という共通の結論を下している。しかし、筆者は自由主義者の実績を「独裁政権と戦ったか否か」という基準のみによって評価することは適切ではないと考える。なぜなら、この二分法だけでは独裁体制下で苦悩した知識人の歴史を十分に探究することができないからだ。

特に、江（2018）は、胡適は自由主義の原則を放棄し、蒋介石の独裁を美化したと批判し¹⁰、金（2023）は、蒋介石に協力的であった胡適に対し、蒋介石を強く批判した殷海光の方が自由主義を貫いた知識人であったと論じた¹¹。しかし、筆者は胡適逝去後の同時代の人物による評価を考慮することで、こうした見解に再考の余地があるのではないかと考える。例えば、胡適が逝去した翌日、政論雑誌『自由中国』編集者、反対党結成運動により投獄された雷震は数日間にわたり涙を流し、「泣くのは民国三十六年の母の葬殮以来だ」と日記に記した¹²。また先行研究では「胡適を統制し、制限した」とされる蒋介石は約一週間後、日記に「革命事業及び民族復興という建国的思想から言えば、胡適の死はその障害の解消を意味する」と記した¹³。

仮に、戦後の胡適が自由主義を放棄したら、同じく自由と民主を掲げ、蒋介石に反対した雷震は、果たして彼の死を悼んで涙を流しただろうか。また仮に胡適が蒋介石の命令に忠実に従い、独裁を美化する役割を果たしていたのであれば、蒋介石は彼を「革命の障害」と評しただろうか。

以上の点を踏まえると、「独裁と戦うか否か」という二分法だけでは、知識人の複雑な思想と行動を十分に分析することはできないと考えられる。胡適が語った「千人に千人の自由主義がある」という言葉が示すように¹⁴、自由主義という包括的かつ多様な政治思想の定義は、個人によって異なる場合がある。「自由の追求」という理念が共通しても、その理念を実践する方法は各人それぞれ異なる。

したがって、「胡適の自由主義」を分析する際には、研究者自身の自由主義観を当てはめるのではなく、胡適自身の言動に基づいて彼の自由主義論を解明することが求められる。しかし、従来の研究における「戦うか否か」という二分法は、独裁政治の下で多様な形で活動した知識人の

在り方を無視しており、そのため胡適を十分に分析したとは言えない。

一方、自由と民主を追求した生前の胡適を肯定的に評価しつつ、その追求が必ずしも成果を残したわけではなかったため、胡適を悲劇的な知識人として描いた研究は、楊（2003）、汪（2013）、余（2014）、任（2018）が挙げられる¹⁵。

余（2014）によれば、晩年の胡適は台湾における憲政の維持、言論の自由、学術の独立に貢献したが、終始蒋介石を変えようと試みた彼を「救いようのない楽観主義者」と評した。しかし、余はこの姿勢こそが、胡適の「中国の味わいのある自由主義」の「最後の光」だと評価した¹⁶。しかし、独裁者を変えようとする姿勢を「楽観的」と称することは果たして妥当なのだろうか。言うまでもなく、一個人の行動や選択はその人の理性的な判断に基づいて行われている。つまり、「楽観的」に見える胡適の言動も、慎重な状況判断の上でなされたものである。しかし余の研究は、胡適が行った状況判断の過程を省いたため、胡適がとった言動の経緯を十分に説明していないと筆者は考える。

一方、胡適の死後に着目した研究としては、陳（2013）、張（2018）、陳（2022）、黄（2021、2023）などがある¹⁷。これらの研究は、「胡適と近代中国」における評価を継承しつつ、胡適の思想が台湾民主化に貢献したと結論付けた。また黄論文（2023）は「生前」と「死後」を結びつけるものとも言える。同研究では、胡適と蔣経国の関係に着目し、二人の日記を引用しながら、自由民主を追求した胡適の思想が蔣経国の心に残った可能性を示唆した。更に、胡適の影響を受けて民主化運動に従事した後世の人々が、晩年の蔣経国による民主化推進の背景にあったと論じた。

1950 から 60 年代までを研究対象とし、胡適と蔣経国の関係に焦点を当てた黄論文は、胡適と蔣経国の相互評価を明らかにし、従来注目されてこなかった胡適研究の分野を開拓した。しかし黄自身も同研究内で、「胡適が逝去するまで、胡適に対する蔣経国の評価、及び蔣経国のロシア式の党国思维は変わらなかった」、「私は、蔣経国が胡適の影響を受けなかった可能性を認めるが、影響を受けた可能性についても考えたい」と述べた¹⁸。

したがって、胡適が生前、具体的にどのように蔣経国に自由民主の理念を伝えたのか、その試みが効果をもたらしたのかについては、依然として明確ではない。そこで本稿は「生前の実践」に着目し、蔣経国と比べて胡適がはるかに多く交流した当時の台湾の最高指導者である蒋介石、及び蒋介石の独裁に反対した知識人や活動家との関係に注目する。

また「胡適は台湾民主化に貢献した」という結論についても、本稿で再検討を試みたい。なぜなら、胡適の思想が人に与えた影響を明確に検証することは困難であり、思想の受容と解釈は人によって異なるため、「胡適の影響を受けて民主化に従事した人々がいたので、胡適は台湾民主化に貢献した」という論の因果関係には曖昧な点があることを指摘したい。胡適にとって予測不可能な台湾民主化の過程は、果たして彼とどのように関係しているのか。また、民主化の達成を胡適の功績として捉えることは妥当なのか。これらの課題については、再検討が必要だと考える。

前述の通り、「千人に千人の自由主義がある」。だからこそ、本稿を「胡適研究」に位置付ける筆者は、胡適の自由主義思想における「彼独自の何か」を探り出したい。「後世にとっての意義」

を探ろうとするのであれば、自由、民主、容忍といった、人によって解釈が異なる概念よりも、「独裁時代において胡適が如何に自由民主化のために努力したか」に着目することで、胡適の思想及びその意義の具体像がより明確になるのではないか。

最後に、本稿が用いる「協力の中の反抗」という視点及びその射程について説明する。前述のとおり、胡適逝去後の蒋介石の反応を考慮すれば、胡適が蒋介石に完全に従属していたとは言いきれないと筆者は考える。しかし、胡適が終始蒋介石政権に協力的であったこともまた事実である。本稿では、「蒋介石政権に協力する立場を維持しつつ、その統治に異議を唱える姿勢」を「協力の中の反抗」と定義し、胡適がこの姿勢を以て実践した行動、及びその限界と意義について検討する。

更に本稿で用いる「協力の中の反抗」とは一種の政治的姿勢であるため、分析の焦点は政治史に置く。周知のように、胡適は「全面的西洋化」を提唱し、その結果、伝統文化を重視する儒家派の知識人と中華文化の保護者として自任した国民党との間で何度も対立が起こった。また、彼の西洋化論を巡る論争は、彼の死後においても議論され続けられた。

もちろん、伝統文化論を巡った胡適と国民党の軋轢を反抗の視点から分析することは可能である。しかし、文化論に関する対立は本稿が扱う「独裁政権下での自由主義に関わる政治的实践」に直結しないため、本稿では胡適の生前の政治的な主張と姿勢に着目し、「協力の中の反抗」を政治史の文脈に基づいて分析する。

以上を踏まえて、本稿は胡適、蒋介石、雷震の個人史料や政論雑誌『自由中国』などを使用し、終戦前後から1962年までの胡適の「生前の実践」を対象に、「協力の中の反抗」という視点から戦後胡適の自由主義を分析し、その限界と意義を明らかにすることを目的とする。第1節では、胡適が国民党への協力を決意した経緯を整理し、第2節では、中華民国台湾移転後の胡適の政治的主張及びその変化を分析する。最後に、第3節では胡適の「協力の中の反抗」という実践の限界と意義を考察する。

第1節 「独立知識人」から親国民党知識人へ

1. 迫りくるソ連の脅威

戦後の胡適は一貫して反共主義を掲げる知識人として知られているが、1920年代から1940年代にかけての胡適の言論において、左派思想全般に対する強い批判は見受けられない。確かに胡適は1919年に後に中国共産党の主要メンバーとなる李大釗との間で「問題と主義」について論争を繰り広げ、また、陳独秀が創刊した『新青年』が左傾化したことを受けて同誌を離れた。なお、1926年7月から1927年5月にかけて欧州諸国を周遊した胡適はソ連の理想主義に惹かれ、社会主義思想を受容する一面を見せ¹⁹、米英の改良主義を「新自由主義」や「自由的社会主義」と呼んだ²⁰。しかしこの時期における胡適の社会主義に対する好意は、主に政治的自由と経済的平等の両立を目指す米英の改良主義から由来した。一方、胡適はプロレタリアート独裁に賛同しなかったものの、ソ連の政治家たちの理想主義や革命に対する情熱に感銘を受けた一面もあった。

なお、ソ連に対する胡適の評価は1941年から変わり始め、この頃の彼は既にソ連を反民主勢力の一員として捉え始めていた。当時、駐米大使を務めていた胡適は、1941年7月25日に「イデオロギーの衝突」という講演を行った。胡適は、ドイツ、イタリア、ソ連を反民主的な全体主義国家として挙げ、これらの国々と英米などの民主主義国家との根本的な違いを、①急進的・過激な革命と進歩的・漸進的な改革、②統制的・画一的な原則と、異なる個人が発展する原則という二つの矛盾に基づくと論じた²¹。

その後、ソ連に対する胡適の懸念は増える一方だった。日本降伏後、国民党は制憲国民大会を開催したが、国民党、民社党、青年党のみが出席し、共産党と民盟は参加を拒否した²²。訓政から憲政への移行に向けて、国民党は各分野の有識者に政府への参加を呼びかけ、その中には胡適も含まれていた。蒋介石の勧誘を傅斯年から受け取った胡適は、1947年2月6日に「私は喜んで国と政府の手伝いをしたい。だからこそ政府には入りたくない。政府に入ると、私が三十年間かけて築き上げた独立した地位は壊され、何もできなくなり、公正な言葉を言える地位も失ってしまう。だから、在野のままにいた方が、国と政府のために尽力できる」と返答した²³。

二週間後の2月22日、今度は王世杰から蒋介石の依頼が伝えられたが、胡適は「政府と国のために発言できる独立した一人か二人を残したい」、「私は決して名誉を愛する人間ではない」、「私は一人で行動できる自由を諦めたくない」と述べ²⁴、その意志を変えることはなかった。

胡適は「在野」の立場を堅持し続けたが、この時期の彼は既に国民党に偏り始めた。その一例として、共産党と民盟の支持を得ない状況で憲政へ移行する国民党に対し、胡適は非難することなく、むしろ高く評価したことが挙げられる。

1947年3月18日に行われたイギリス大使との会談において、胡適は「英米の政治体制に最も深く影響された孫文は決してソ連式の一党独裁制を最終目標として認めない」、「今後の国民党は孫文の遺教を復活させ、建党当初の約束を履行し、ソビエト式政党から英米式政党に戻る」と言い、国民党の「他政党との政権の共有」と「英米式政党への回帰」を「近代政治史上において重要な意義を有する出来事だ」と評価した²⁵。

このように、孫文の政治構想に「英米式の民主政治の達成」という目標が含まれていると理解したため、胡適は国民党に期待した。一方で、マルクス・レーニン主義とプロレタリアート独裁を掲げ、胡適に反民主勢力とされたソ連から大きな影響を受けた共産党が目指す政治制度は、胡適の期待とはかけ離れたものであった。

胡適は依然として「独立した知識人」と自任していたが、世界と中国の情勢はその選択肢を狭めていた。1947年5月18日の文章「二つの世界の明朗化」において、胡適は今後の世界が長期的に米国側とソ連側に分かれつつも、第三次世界大戦には至らないと論じたが、「ソ連は勢力範囲を拡張することで自身の安全を確保する」と指摘した²⁶。

同年6月2日、北京大学の学生は、国民党統治下での物価の高騰や国共両党の衝突の激化に不安を感じ、「中国の希望はどこにあるのか」と胡適に手紙で尋ねた。胡適の返信は同月22日に公開され、彼は「中国はもちろん助かる見込みがある」と言い、「現存の強国の中で、ある一国のことには完全に安心できないが、他の国々は私たちが侵略する意図は全くない。我々の未来は、

今後の努力次第だ」と述べた²⁷。

若者を慰める中で、胡適は「ある一国」に対する懸念を隠せなかった。明らかにこの「一国」とはソ連であり、「ソ連が中国を侵略する意図がない」と断言できなかった理由は、恐らく彼が「二つの世界の明朗化」で述べたソ連の拡張政策が、最終的に中国にまで及ぶことを懸念したからだろう。

また、「二つの世界」が進む中で、胡適は中国が民主世界の一員となる必要性を訴えた。1947年8月の文章「目前の世界文化の趋向」は、こうした趣旨に基づいたものである。胡適は、中国も文明国と同様に、「自由選択・自由流通」によって発展し、「科学で人の苦痛を解消し、幸福を増進させる」、「社会保障で人の生活を向上させる」、「民主政治で人の思想を解放し、才能を発展させ、自由且つ独立した人格を作り上げる」という三つの目標を追求すべきだと記した²⁸。

この文章が発表された後、民主への胡適の自信に対して多くの疑問が集まった。これを受けて、彼は「我々は我々の方向を選ばなければならない」という文章で「思想、信仰、言論、出版の自由は社会改革と文化進歩の基本的条件である」、「最も包括的な政治体制として、民主主義は社会の全階層に浸透し、全人民の利益を代表することができる」、「民主主義は完璧な制度ではないが、民主主義によって自由を愛し、異端を容忍できる文明社会を育成することができる」、「二回の世界大戦も民主勢力が勝利したため、将来、民主主義は必ず勝利する」と、彼が民主主義を信じる理由を説明した²⁹。

戦後の胡適が言及した「反民主の勢力」は明らかにソ連の共産主義陣営だと考えられる。そしてソ連との対抗を強調し、民主世界への参加を呼びかけた背景には、米英式の自由と民主に対する憧れと中国の安全保障があったと考えられる。

1948年1月に友人に送った書簡の中で、胡適は「現在、多くの人々は戦後のソ連を戦前のドイツと日本よりも恐ろしい侵略勢力だと考えている」、「昔の私もソ連に大きな期待を抱いていた」、「1939年9月以降、ポーランド分割とフィンランド侵略を見て、私はソ連を疑い始めたが、まだ悪い方向に考えなくなかった。なぜなら、中国の北に侵略国家があるという現実を私はまだ受け入れなくなかったからだ」、「しかし、ヤルタ協定や中ソ友好同盟条約、更には東三省での略奪などを見て、鉄のカーテンが外モンゴル、北朝鮮、旅順、大連に降りた。中欧やバルカン諸国はともかくとして、私たち中国がソ連から受けたこの二、三年間の侵害だけを見ても、私は今後のソ連が非常に恐ろしい侵略勢力になると断言せざるを得ない」と、中国がソ連に徐々に浸食されていることを指摘した³⁰。

2. 亡国に直面する胡適

その後、共産党の攻勢が激化し、1948年12月15日に胡適と夫人は蒋介石が派遣した飛行機に乗り、北平から出発して南京の明故宮空港に到着した。その後、胡適は教育部が用意した上海赤峰路の招待所に住み始めた³¹。

南下してからの胡適は、「最近、自分はこの三十年間で歩んできた非政治的な、思想文化的な救国の道が正しかったか間違ったかを考える」と言い、自分自身を疑い始めている³²。更に、招

待所にいた胡適は後に彼の秘書となった胡頌平に「私のような人間に対しても、国は金を使って招待するのか」と言い、胡頌平が「ここは臨時の住所です。仮に先生が海外に行き、政府のために外援の仕事をすれば、まだ国を救うことができます」と答えると、胡適は「こんな国家、こんな政府では、私は如何に外国人に顔を向けて話すのか」と言い、二人は沈黙した³³。

国を救いたいと思っても、絶望的な国の情勢に直面した胡適は、自身が何をすべきか分からなくなり、深刻な苦悩に陥った。

12月17日、蒋介石に招待され南京に向かった胡適は、同日に米国のスチュアート大使と会談した³⁴。胡適は、戦後の自分は学術に没頭し、思想の戦場で努力しなかったため、共産主義が今日の中国に蔓延したと語り、中国を救うために、仮にまだ自分にできることがあれば必ず行くと泣きながら話した³⁵。また、南京に残って新年を迎えた胡適は、傅斯年と共に酒を飲みながら、江南に建国した東晋の滅亡を痛惜した陶淵明の詩「擬古」其九を読み上げて涙を流した³⁶。二人がこの詩を詠んだのは、南中国から革命を起こし、北伐以降に政治・経済・文化の中心を南京・上海に移した国民党が創立した中華民国の滅亡を嘆いたと考えられる。恐らく、二人はこれが中国大陆で過ごす最後の新年であることをわかっていたのだろう。

1949年1月8日の夜、胡適と蒋介石は面談を行った³⁷。胡適の日記によると、食事の後、蒋介石は再び彼に米国に行くことを勧めた。蒋介石は「大使を務めなくても、使命を背負わなくても、米国の援助も求めなくても構わない。ただ外に出て、色々を見てきてほしい」と話した³⁸。そして同年4月6日に胡適は上海からフェリーで出発し、21日にサンフランシスコに到着した³⁹。

1949年5月11日、胡適は蒋介石に書簡を送り、「我が国への米国の態度について、5月6日に顧維鈞大使が長文を送ったが、その文章は大使館が起草し、その後私が全て書き直した」、「昨夜、ワシントンD.C.に行った後、ウェデマイヤー將軍の家に泊まり、深夜まで話し合った」、「將軍との会話を先生（筆者注：蒋介石）に報告したのは、先生に今後米国からの援助の可能な形式を提示したいからだ」、「米国に来てから既に約二十日が経過し、私は毎日心配しているが、何もできないことがない。私の見解では、我々は決して現在の米国の領袖（ホワイトハウスと国務省）の頭越しに、野党（共和党）や世論に対して工作をしてはならない。野党や世論を利用して与党の人士に圧力をかけても、余計に不快感を増すだけだ。最も良い目標は、対華政策を両党共同の政策にさせることだ」と⁴⁰、渡米後の見聞を蒋介石に詳しく伝えた。

同月28日、蒋介石は書簡で胡適に対して次のように述べた。「現在の対米外交の中心は中共政権を承認させないことであり、実際の援助は二の次である。方法に関しては、行政と立法の両方から推進させて良いが、主に行政に集中した方が適切だ。顧維鈞に協力して、彼と共に考えてほしい」と指示した⁴¹。

この二通の書簡から、以下の点が読み取れる。①胡適は当時の駐米大使及び大使館が起草した電報の内容を全部書き直す権限を持っていた、②胡適は米国の要人と接触し、対中援助に関する情報を収集し、これを蒋介石に報告した、③胡適は米国国内の政治及び世論を観察し、中国の対米政策を蒋介石に提言した、④蒋介石は胡適に対し今後の対米外交の方向を指示し、大使である顧維鈞と「協力し共に考える」ように要請した。

二通の書簡を見ると、蒋介石は決して胡適に「ただ外に行って色々見てきてほしい」だけではなかった。渡米を求めた蒋介石は、胡適に正式な肩書きを与えないが、胡適がもたらす外交的役割に期待していたと考えられる。

以上を踏まえると、1947年までは「独立した知識人」としての立場を維持しようとした胡適が国民党側を選択した理由は、①自由主義者として、共産主義という思想及び政治制度への拒否、②民主主義者として、英米式の政治制度への移行、即ち「憲政」という中華民国の民主化が中断される可能性への懸念、③中国人として、自国の領土と主権がソ連に侵害される状況への危機感、④影響力のある知識人として、これまで政治と距離を置いてきた自身が国の崩壊を防げなかったという罪悪感、に整理できる。

第2節 民主化改革と自由の促進に向けて

1. 民主化改革の提案——「分化論」

渡米して二年後の1951年5月31日、胡適は蒋介石に約四千字の長文を送った。胡適は、孫文の連ソ容共政策と、国民党の長年にわたる一党独裁が、国民党が中国を失った根本的な理由だと指摘した。彼は、第一次国共内戦以降、国民党の改革が何度も失敗した原因は、蒋介石が政党、政府、軍隊の権力を全て自分に集中させたからだと論じた。これを踏まえて、胡適は現在の国民党が行うべき改革は、まず蒋介石が権力を手放すことから始めるべきだと提言した⁴²。

胡適は書簡で国民党の改革を次のように提案した。彼は「今は多党による民主憲政を実行する好機である」と言い、国民党内の派閥が互いを敵視しているなら、派閥ごとに分離させて新政党にすべきだと提案した。なぜなら、「敢えて一つの党でまとめようとしたら、各派閥は裏で権力闘争を繰り返すため、派閥を政党にして、その権力闘争を公開し合法的に転換させることで、国民党内の内紛を解決できる」からだ⁴³。

また彼は、「このまま権力を集中して、派閥を独立させないなら、党内の権力闘争は決して終わらない」、「各派閥が新政党になれば、中国（筆者注：中華民国）の政治は一瞬で元気に、健康になり、その未来が明るくなる」と、分化すべき理由を述べた⁴⁴。

最後に胡適は、「ここ数年、我が公（筆者注：蒋介石）は何度も私に新政党を結成してほしいと望みました。我が公の大きな雅量に対し、私は非常に尊敬しています。しかし、人にはそれぞれできることとできないことがあります。決して強引に押し通すべきではありません。まさに私がここ数年で堅く我が公を支持し、国内外の共産党に反対するのと同じように、多党の対立において、私は甲党を堅く支持し、乙党に反対することができます。私は党を作る精力も勇気も持っておらず、張君勱の政党結成運動にも同情しません。そのため、私はここ数年、何度も国民党の友人たちに対し、国民党が自由分化し、いくつかの独立した政党を作るべきだと話してきました」と記した⁴⁵。

この書簡から胡適が望んでいた国民党の民主化改革の方向がわかる。即ち「蒋介石が政党、政府、軍隊に対する権力を手放し、国民党内部から複数の政党を作り出す」ことである（以下、分

化論)。

ただし、胡適の「分化論」には問題があった。仮に国民党が分化しても、政治権力を握る人々は依然として分化前と同じであり、不完全な権力分散となる。当時中国大陆から台湾に移った政党は国民党だけではなく、民社党や青年党もあった。仮に胡適が西洋の多党制を実現しようとするのであれば、彼は民社党や青年党の支持や育成を提言すべきだった。

それでも胡適は「分化論」を提案した理由は、彼が蒋介石の権力観を熟知していたためだと筆者は考える。自分を孫文の後継者と自任した軍人出身の蒋介石は、決して「反共復国」という重大な時期に新勢力に政治権力を分け与えない。それゆえ、国民党から政党を作るという提案は蒋介石に採用されやすいと、胡適は考えたのではないか。たとえ分化後の新政党が国民党の衛星政党に過ぎなくなる可能性があっても、胡適にとって、国の政治を改善させ、その未来を明るくする民主化への第一歩として、分化論は十分であろう。

次に、胡適の「我が公を支持し、国内外の共産党に反対する」との言葉から、彼が分化論を提起したもう一つの理由がうかがえる。仮に政治権力が完全に分散した場合、全力で共産党と戦うことができなくなるため、彼は権力を分ける対象を国民党員に限定する分化論を蒋介石に提案した。また、反対の対象を国内外の共産党と記し、支持の対象を国民党ではなく蒋介石と書いた点から、胡適からした反共という重大な目標における蒋介石という指導者の重要性がうかがえる。

最後に「張君勳の政党結成運動に同情しない」という一文から、胡適が前述した「分化論という不完全な権力分散」を望んでいたことが再確認できる。「中華民国憲法の生みの親」として知られる張君勳は蒋介石の統治に不満を持ったため⁴⁶、1949年以降に海外に移住し、それ以降何度も胡適と「第三勢力」について討論したが、胡適は常に消極的な態度を示した。

1952年5月7日に彼と張君勳はワシントンで第三勢力について議論したが、胡適は「現在はコミンテルンの勢力と反共の勢力だけが存在し、決して第三勢力の可能性はない」、「香港での第三勢力は所詮、米国国務省からはした金しか受け取らず、力がなく、何も達成できず、政策に影響を与えることはできない」と否定した。同年11月11日の台北版『中央日報』によると、当時の胡適は更に張君勳に「共産党と闘争する際に重要なのは兵力である。君はどれほどの師団を持っているのか。共産と反共の大闘争という激流において、共産でなければ、徹底的な反共でなければならない。決して中道の余地がなく、徘徊して迷う余地などはない」と伝えた⁴⁷。

更に、同月19日に台湾で開かれた記者会見で、胡適は再び第三勢力を否定し、「我が国が不安定だった三、四年前、米国の友人が私の態度を尋ねた際、如何に情勢が困難であろうと、私は堅く、道義を以て蔣総統を支持すると答えた。私のこの考えは永遠に変わらない」と述べた⁴⁸。

中華民国が代表する「自由、民主、憲政」を支持するが、蒋介石の統治に異議を唱えて海外で活動していた張君勳及び「第三勢力」に対して、胡適は否定的な見解を示し、「道義をもって蔣総統を堅く支持する」という立場を表明した。なぜなら、「民主対反民主」という思想的、軍事的対立において、決して中道の余地や「第三勢力」の存在は許されないと、胡適が認識したからだ。胡適は国民党内の民主化改革を期待していたが、他党に政治権力を握らせたくなかった。彼が提案した民主化改革は、反共という目標を揺るがせない前提で語られた。

ここまでの胡適の言説をまとめると、中華民国、中国国民党、蒋介石はいずれも「民主勢力」として大きな枠組みの中にあり、中国国内外の共産主義及び共産党からなる「反民主勢力」に対抗しなければならない。そのため、共産主義に反対する全ての人々は、「民主勢力」である中華民国、国民党、蒋介石を支持する必要がある。「共産か共産以外か」という戦後観が、彼の行動方針の根底にあると言えるだろう。

国民党と蒋介石を堅く支持しているが、胡適は自由と民主を諦めたとは言い切れない。1952年9月15日、張君勱と面談した四ヶ月後、胡適は再び蒋介石に書簡を送った。胡適は、来月中旬に開催する国民党第七期全国代表大会は良い機会だと言い、蒋介石が大会で民主政治の土台として「多党制のための国民党分化」、「党内民主化のための総裁辞任」、「憲政のための言論の自由の拡張」を行うべきだと期待を示した⁴⁹。なお胡適の提言に対し、蒋介石は日記で「二つの政党に分けるとするのは、ただの書生の見解に過ぎない。中国の学者は常にこういう感じなので、国の建設では何も実績がないのだ」と批判した⁵⁰。

胡適は「分化論」を提言したが、この頃の蒋介石は国民党の「改造」に力を注ぎ、更なる権力集中へと邁進していた。そして第七期全国代表大会の前日、10月9日に開かれた中央改造委員会第四百二十回会議において、改造の終了を宣言した蒋介石は、権力が高度に彼に集中する「領袖独裁」が確立された⁵¹。

2. 自由の促進——「千人諍臣」、「毀党論」

蒋介石は「分化論」を「書生の見解」と呼んだが、三ヶ月後の1953年1月16日に胡適と面談した後、蔣は翌日の日記に「胡適の意見は金玉之言だ」、「深く感動した。彼は生涯の諍友だ」と書いた⁵²。一方、胡適はこの日の面談内容を日記に記録し、冒頭で「耳に痛いことを話したが、意外にも彼（筆者注：蒋介石）が受け止めた」と書き留めた。胡適は蒋介石に対し、「実際、現在の台湾に言論の自由がなく、誰も蔣経国と蔣総統を批判しない」と述べ、「総統は百人の諍臣を持たなければならない。千人の諍臣を持つなら最も良い。言論の自由の開放は、即ち自分から千人百人の諍臣を作ること（以下、千人諍臣）である」と伝えた⁵³。

胡適はこの面談で「分化論」ではなく、代わりに「千人諍臣」を提起した。提言の方向を民主化から自由の促進に転換したことは、胡適が政治情勢を観察した後の結果だと筆者は考える。党を改造させ、権力を手放さない蒋介石に対し、これ以上党の民主化改革を提言しても無駄だと考えた胡適は、民主化の議論を避け、言論の自由の側面から提言したのではないか。

そして、胡適自身も行動によって「千人諍臣」を実行した。代表的な例としては彭明敏（1923-2022）が挙げられる。彭明敏は台湾の国際法学者であり、台湾独立運動の代表的な人物として知られる。1948年に台湾大学政治学部を卒業後、彭は1953年にカナダのマギル大学で法学修士号を取得し、1954年にフランスのパリ大学で法学博士号を取得した。国際法学界で高い学術的成果を収める一方、常に台湾の法的地位に関心を持ち続けた彭は、1964年に「反攻不可能」、「一つの中国、一つの台湾」、「憲法再制定」を主張する「台湾人民自救宣言」を発表した後に逮捕され、懲役8年の有罪判決を受けたが、国際からの圧力を受けた政府は翌年末に彭を釈放した⁵⁴。

1952年の春、奨学金の受給期限が迫り、経済的困難に直面した彭明敏に対して、胡適は「ある匿名希望の方が、貴方の二年目の学業を経済的に支援すると承諾した」と書簡で伝え、これにより彭は無事にカナダで修士号を取得することができた⁵⁵。また、1960年に開催された「中米文化学術会議」において、約40人の代表団の中で、台湾出身の彭の参加に対し不満を抱いていた同席者に対し、首席代表である胡適は積極的に彭の参加を擁護した⁵⁶。そして、胡適が逝去した当日に、彭はあの「匿名希望の方」が実は胡適であったことを知り、自伝で「私は最も自分を理解し、最も無私な先輩かつ支持者を失った」と嘆きの言葉を記した⁵⁷。

胡適が台湾独立派の彭明敏に多くの支援を与えた理由は未だに不明だが、彭は回憶録で「たぶん胡適は、私の学術成果及び台湾大学の将来のために私を世話した」と書いた⁵⁸。胡適は彭の独立志向や国民党に対する不満を認識していたため、彼を国民党側に勧誘したかった可能性は否定できないが、胡適は政治的な立場よりも、学問的な立場から彭と接したと筆者は考える。なぜなら、彭が台湾独立を公開に主張し始めたのは、胡適が逝去した後のことだからだ。当時の胡適にとって、彭は台湾出身の優れた学術人材に過ぎなかった。そして、このような人材を育成することは、学問の発展を促進するだけでなく、胡適が提唱した「千人諍臣」の実現にも繋がるだろう。

言うまでもなく、台湾独立は国民党に反政府運動と捉えられた。史料から胡適が台湾独立派に対してどのような見解を持っていたかは確定できないが、国民党政権を支持しない者に対する胡適の態度は、呉国楨事件と雷震事件を通じてうかがえる。

1953年から1954年にかけて、米国の援助を得た後の蒋介石は王世杰をはじめとする国民党自由派を権力の中心から排除した⁵⁹。国民党の統治が一層抑圧的になった状況に対し、最初に反抗したのが呉国楨であった。

呉国楨（1903-1984）はプリンストン大学で哲学博士号を取得し、米国で広い人脈を持っていた。彼は1949年12月に蒋介石に重用され、台湾省政府主席兼保安司令に任命された。法治原則を重視した呉は、蔣氏親子による統治、特に不透明な逮捕や裁判に対して異論を唱えていたため、蔣経国の特務機関と軋轢が生じ、最終的に呉は特務機関から命を狙われることとなった。その結果、呉は1953年4月に辞任し、翌月には妻と共に米国に移住した⁶⁰。

1954年2月7日、呉国楨は米国での取材において、中華民国政府は「非民主的」、「独裁的」であり、「共産党と戦うには共産党の方法を採用するしかない」と信じる人たちがいる」と批判した。また、同月27日に呉は国民大会に意見書を提出し、政府の「一党独裁」、「政党と軍隊の結託」、「特務の横暴」、「人権侵害」、「言論の不自由」、「思想統制」などを指摘した。更に、呉は国民党の資金源に対する調査、国軍政工制度の廃止、特務機関の権力制限、言論問題を解決するための委員会の設立、中国青年反共救国団の解散などを提案した⁶¹。呉国楨の文章は1954年3月9日に開催された国民大会主席団第八回会議で討論され、胡適も同会議に出席した⁶²。

その後、呉国楨の批判は更に激化した。1954年6月、呉は米国の雑誌『LOOK』に「あなた方の金で台湾に警察国家が作られた」という文章を発表した。その内容は国民大会への意見書と変わらないが、彼の意図は米国の民衆に「台湾における蔣氏親子の警察国家はあなた方の税金で維持されている」と伝えたかったとされる⁶³。

呉国楨の動きに対し、胡適は1954年8月3日に英語で彼に書簡を送った。胡適は呉を「常識と道徳観がない人間」と呼び、「君の母校の学長は、真実と離れすぎた君の文章を憎らしく思った」、「私もこの文は読めるものではないと思った」、「君はでたらめで米国の民衆を騙し、君の国と政府を汚した」と非難した⁶⁴。更に、同月16日に米国の雑誌『New Leader』に胡適が執筆した「台湾はどれほど自由なのか」が発表され、胡適は、現在の台湾が中国史上で最も有効な管理を受けており、人民は自由に居住、移転、就職、生活できること、また、海外の記者が自由に入出国し、いつでも報道できることを強調し、呉国楨の文に反論した⁶⁵。

興味深いことに、1954年2月16日の『中央日報』によると、胡適は「今後の自由中国は、共産党の独裁専制と完全に相反する環境、自由と民主の土台を作り、中国大陸の民意と世界の同情を勝ち取らなければならない。民意と自由世界の支持があれば、中国大陸の赤色政権は必然的に崩壊する」と語った⁶⁶。また、4月5日に米国に渡航する前に記者に「私は憲政をより一層実施してほしい」、「無条件の自由は全く危険ではないと考える」と話した⁶⁷。胡適が自由と民主の実現を強調する一方で、呉国楨を非難し反論した理由は、呉の文は民意と自由世界からの支持を失わせ、最終的に中華民国の立場を危うくする可能性があると感じたからだと考えられる。

呉国楨の文章は米国の世論にどれほど影響を与えたかについては明言できないが、その影響を受けた人物として、『自由中国』編集者である雷震が挙げられる。雷震(1897-1979)は1917年に国民党に参加し、長年にわたって党の要職を歴任し、上層部で広い人脈を築いていた。1949年に総統府の国策顧問や国民党中央改造委員会の設計考核委員会委員を務める一方、彼は『自由中国』の編集に尽力した⁶⁸。1954年3月、米国広報文化交流庁は雷震を三ヶ月間の視察に招いたが⁶⁹、呉国楨事件を受け、政府は雷震の出国を終始許可しなかった⁷⁰。

国民党の統治が抑圧的になる中、『自由中国』は数多くの文章を掲載し、政府に対する批判を強めた。このため、1954年4月から国民党中央党部内では『自由中国』の刊行停止を求める声が現れた⁷¹。更に同年12月16日に、第十一卷第十二期の『自由中国』は学校での政党教育、主義教育、軍事教育の廃止を訴える「教育の危機を救え」という読者投稿を掲載した。激怒した蒋介石は同月28日の「宣伝会報」会議において雷震の党籍剥奪を指示した⁷²。渡米が許可されず、党籍も剥奪された雷震に対し、胡適は1955年1月26日に総統府秘書長の張群に書簡で、「私は雷震をよく知っている。彼は海外で自国と政府の名誉を損ねるような言論を行わないことを私は保証できる。この保証は、国内で言論の自由を提唱している仲間たちへの戒めでもあるため、強く保証できる。どうかこの点を総統に伝えてください」と、雷震を擁護した⁷³。

なお、史料から『自由中国』における「戒め」の存在を確認できなかったため、「戒め」とは胡適個人の主張に過ぎないと考えられる。呉国楨事件と張群への書簡を併せて見ると、胡適の「千人諍臣」は分化論と同様、反共を揺るがせない範囲に留まることがわかる。

国民党自由派が失脚した後、胡適は「分化論」の代替案を模索した。1956年秋頃、彼は記者に対して自身の新たな主張(以下、毀党論)を語った。胡適は、現在の中国において政党組織は不要であり、反共闘争において、人民自身から全体主義の暴政を打破する力を生み出すことが可能であるため、ナショナリズムのほうが重要だと言い、政党の存在、風格、観念は自由主義と相

容れないと指摘した⁷⁴。

1956年後半以降の胡適が「毀党論」に転じた理由について、筆者は次のように考える。蒋介石によって党、政、軍の権力が集中する中で、党自体の存在がもはや無意味に近いものとなったため、権力の分散や党の分化を唱える必要がなくなった。蒋介石は国民党を反共復国のための革命政党と位置付けたが、この政党観は黨員と国民の反感を招き、呉国楨や雷震のような人物は今後も出現する。ゆえに蒋介石は政党本位ではなく、国家及び国民本位で行動しなければならない。胡適の「毀党論」は、彼の「千人諍臣」を踏まえ、呉国楨と雷震の状況を考慮した上で発展した主張だと筆者は考える。

なお、「毀党論」に対し、蒋介石は1957年1月8日及び9日の日記に「こうした文人政客は実に恥を知らない。共匪でさえ及ばない。今回の件は私にとって政治上の大きな教訓だ」、「胡適は本党の革命に反対するだけでなく、心の底から本党を滅ぼそうと考えており、共産党の奴隷となることをいとわないと思う。この勢いを抑えなければ、二度と革命について論じることができなくなる」と⁷⁵、「分化論」の時と違い、非常に不満な態度を示した。

胡適が政党意識を諦め、「毀党論」に転じた一方で、党籍剥奪された雷震は、反共を語る前にまず国の自由と民主を推進すべきだと考え、そのために反対党が必要だと主張した。

1956年10月29日、雷震は胡適への書簡において、「今日の台湾における国民党の統治は、中国大陆時代よりも酷くなったと、多くの人々は考えている。現在の政治は既に八方塞がりとなり、反対党を結成し、政府を監督しなければ、他に方法は思いつかない」、「仮に先生（筆者注：胡適）にこの新政党を指導してくれれば、民社党や青年党、国民党の一部、そして無党派の人々を結集した政党を作ることができ、二党制の実現が可能になる」、「先生が新政党を指導してくれれば、私は一生この党に尽力し、決して政府のために働かない。たとえその政党が執政することになっても、私は表に出ず、裏方で支援する。今の状況では、少数の犠牲者が出なければ、国に未来がない。先生ならこの情勢をよく理解しているはずだ。他に方法があるだろうか。国民党を二つの政党に分けるのは不可能だ」、「先生、国の未来を考えてください。これは決して第三勢力ではない」と述べた⁷⁶。同年11月5日と13日には、雷震は胡適に対し、国民党の腐敗と反対党の重要性を論じた書簡を二通送った⁷⁷。

約十ヶ月後の1957年8月29日、胡適は雷震に対して次のように返信した。「この一年間、私は反対党設立に関連する手紙に一通も返答しなかった。その理由は、政党を組織することなど一度も考えたことがないからだ」、「私は数年前には国民党の分化を期待したが、今はそれを諦めた」、「今は無駄に党を作ること精力を使うのではなく、国家をスローガンとして国内外の中国国民の感情と心を集めることを考える。私は政党を作る考えがない」と、消極的に述べた⁷⁸。

そして1958年4月8日、胡適は中央研究院院長に就任するため台湾に移住した。空港で記者に「現在の中国（筆者注：中華民国）には強力な反対党が必要なのか」と質問された際、胡適は「私は昔から政治に興味がなく、歳を取った今では、更に興味がなくなった」と答えた。記者が再度、「これは政党結成に関する噂の否定なのか」と尋ねると、胡適は「問題を政治に関連させないでほしい。しかし、先ほど君が言ったこと（筆者注：政党結成の否定）は正しい」と述べた⁷⁹。

3. 言論の自由の砦——『自由中国』と政論家の役割

1958年5月27日、『自由中国』が主催した歓迎会において、胡適は興味深い演説を行った。彼はまず言論の自由の重要性について言及し、『自由中国』は言論の自由の促進に多大な貢献をしてきたことを評価した一方で、その手法にはまだ改善の余地があると指摘した。胡適は「例えば『大陸反攻』に関して、これは単なるスローガンに留まらず、最も重要な希望と象徴である。これは台湾における一千万人だけでなく、海外数千万の華僑同胞にとっても希望の象徴である。我々はこうした無数の人々の希望を象徴するスローガンに触れるべきではない」と述べ、再び彼の「反共を揺るがせない範囲での言論の自由」に対する立場を示した⁸⁰。

その後、胡適は反対党に対する自身の見解を語り始めた。彼は、政党を結成するなら、政府の誤解を招く「反対党」という名称を避け、教育界や若者、知識人を集めて、政権奪取を目指さない「在野党」を作るべきだと述べた⁸¹。胡適は、知識人を基盤とする在野党が長期間野党として存続し、その後新たな方向へと進展する可能性があると言及し、「共に言論の自由のために尽力しよう」と呼びかけ、演説を終わらせた⁸²。

この演説の意図は、明らかに『自由中国』における反対党結成の勢いを抑えることにあったと考えられる。言うまでもなく、胡適が提唱した「在野党」と、『自由中国』知識人たちが目指した「反対党」は、根本的に異なる性質を持つ組織であった。従来の研究において、「胡適は雷震の反対党結成運動を支持した」という見解が存在し⁸³、確かにこの演説を見ると、胡適は政党結成を完全に否定しなかった。

しかし胡適が賛同したのは、政府と同一戦線に位置し、政権奪取を目指さない「在野党」であり、決して雷震らが構想した、国民党から政権を奪うことを目指す「反対党」ではなかったことは明らかである。雷震の「仮に先生が新政党を指導してくれれば、私は一生この党に尽力し、決して政府のために働かない」という姿勢は、胡適にとって受け入れ難いものであったであろう。

そして、胡適が何度も『自由中国』に「在野党」を勧告した理由は、彼が1959年に書いたメモ「今日の政論家が持つべき態度」から読み取れる⁸⁴。

胡適はメモの最初に「政論の対象は政府である。政府が良くなり、力を持ち、成功することを望むのが、我々の根本的な態度である」と記し、続けて「東風且伴薔薇住、到薔薇春已堪憐」と書き留めた。この言葉は、宋末元初の詞人である張炎が南宋滅亡後に創作した詞「高陽台・西湖春感」の一部である。

「東風且伴薔薇住、到薔薇春已堪憐」の意味は、「春風（東風と同義）よ、薔薇と共にいよう、薔薇が咲いた頃には春が過ぎてしまっている（春風が吹かなくなる）」である。二つの文を併せて考えると、薔薇は政府を、春風は政論家を象徴していると筆者は解釈する。また、「高陽台・西湖春感」は亡国の絶望に直面した個人の哀愁を表現した詞であり、これはほぼ亡国に近い中華民国を連想させる。要するに、胡適が伝えたかったのは、「政論家よ、とりあえず（台湾にいる今では）政府と共にいて、政府の成功のために尽力しよう。なぜなら、政府が良くなった頃には（大陸の光復や民主化が実現した頃には）我々は老衰し、既に逝去しているかもしれない」ということである。

その後、胡適は「反対党が成立できないことについて、我々は他人ではなく、自分の怠慢を責めるべきだ」、「自分の政権を取り消したい与党はない。仮に力があれば、もちろん我々は政権を取ることができる」、「反対党が結成できないなら、我々は国民党に『諍友』の態度を持ち、国民党が良くなることを望むべきだ」、「政府に対して、党に対して、我々は『諍友』の地位を自任すべきだ。『友』が主要であり、『諍』は次要的である」、「我々は常に『與人為善（善意を以て他人を助けて、他人と共に良いことをする）』の態度を持つべきだ」、「不念善惡、咸與維新（過去の是非を問わず、共に良い方向へ進む）」と記した。

筆者は胡適の考えを次のように解釈する。政府が反対党の存在を許さないという現在の状況を作り出したのは我々知識人であるため、蔣介石を責めるよりも、我々自身が反省しなければならない。そもそも我々の力では国民党に対抗することはできない。仮に我々に力があれば、国民党が反対党を抑えようとしても、それはできなかったであろう。しかし現在、力が不足している我々は「諍友」として国民党に協力すべきである。国民党との友好関係を維持することが最優先であり、批判的意見を述べることはその次である。我々は善意をもって国民党を助け、共に良いことを実現する態度を持ち、過去の是非を問わず、共に改革を進めていくべきだ。

「友が主要的、諍は次要的」という姿勢は、本稿における「協力の中の反抗」そのものを意味していると筆者は考える。1949年から既に政府と同一戦線に立つことを決意した胡適の反抗は、その協力の中で表現され、協力を維持した上でしか行えなかった。このような反抗は政権の変更を要求するものではなく、政権の改革を促すという形で表れた。そのため、公開の場においても、他の知識人の前でも、彼は常に政府を擁護する言動をとり、蔣介石の前でのみ政治批判や提言を行った。

注目すべきなのは、1959年2月12日の日記によると、胡適は「今日の政論家が持つべき態度」を「容忍と自由」の代替案として『自由中国』に寄稿したいと雷震に話したことである⁸⁵。しかし、結局1959年3月16日発行の『自由中国』第二十卷第六期に発表されたのは「今日の政論家が持つべき態度」ではなく、「容忍と自由」であった。

「容忍と自由」は胡適の自由主義論において最も後世に知られた主張であり、文中で胡適は「容忍は全ての自由の根本であり、容忍がなければ自由がない」、「歳を取れば取るほど、私は容忍の意義を重要だと思ってくる」、「我々は自分を戒めなければならない。他人に我々の見解を理解し容忍してもらいたいなら、我々は先に他人の見解を理解し容忍できる度量を養成しなければならない」と述べた⁸⁶。

「容忍と自由」と「今日の政論家が持つべき態度」を比較すると、「容忍と自由」はより温和的な言葉遣いを選んだことがわかる。それでも、国民党に不満を持つ他の知識人にとって、胡適の主張は協力的すぎるものであった。例えば次期の『自由中国』において、殷海光は「同じ容忍だと言っても、権力のない人にとっては簡単だが、権力がある人にとっては難しい」、「中国の歴史を見れば、容忍したのは常に民衆であり、容忍されたのは常に統治者である」と反論した⁸⁷。

胡適は「容忍」を唱えたが、『自由中国』と蔣介石との関係は次第に悪化し、ついに決裂を迎えた。1960年は中華民国総統選の年であり、これは中華民国憲法施行の「憲政」段階における

三回目の選挙であるため、特別な意義を持った。第一に、憲法によると、当時既に二度当選した蒋介石はこれ以上再選できないため、新たな候補者が注目されていた。第二に、今回の選挙は、中華民国が本当に対外宣伝で描かれた「自由、民主な中国」なのかが明らかになる重要な機会であった。蒋介石は1958年2月から総統選挙について考え始め、当初は何度も再選しないと表明していたが、1959年5月の国民党第八回二中全会後、三選出馬を決意した⁸⁸。

それ以降、『自由中国』では徐々に蒋介石の三選を批判する文章が増えた。この状況を見て、胡適は1959年11月20日の『自由中国』十周年の晩餐会において「容忍と自由」という題目で講演を行った。彼は「兵力や政権を有する者だけが権力を持っているのか。それとも、我々のような貧乏な書生、筆を持つ者も権力を持っていると言えるのか」と問いかけ、「我々は決して弱者ではない。筆を持っている貧乏な書生も権力を持っている」、「言葉と文章の力は十分に強力であり」と話した上、「容忍」、「克己」、「自己訓練」の必要性を論じた⁸⁹。

胡適は「今日の政論家が持つべき態度」で「仮に力があれば、もちろん我々は政権を取ることができる（筆者注：つまり現在にはその力がない）」と記したのに、講演で文人の力を強調したことは、胡適は知識人の影響力を否定していないが、その力で現時点では政権を取ることとは考えられない、と示しているのではないか。

その後、『自由中国』で蒋介石の再選を批判する文章は増え続けた。1960年3月1日の『自由中国』第二十二巻第五期に掲載された全ての文章は、「毀憲（憲法を捻じ曲げる行為）」に集中し、総統三選という違憲行為を断じて受け入れられないという主張ばかりだった。五日後、胡適は雷震に書簡で「今の状況は深刻だ。君は私が去年の十周年晩餐会で行った演説の意図をよくわかっていないようだ」、「次期の文章での言葉遣いに用心せよ」と伝えた⁹⁰。そして同月16日、面会に来た雷震に胡適は「君が話した言葉、私が話した言葉は全て私の責任になる。わからないのか。『殺君馬者道旁兒』。みんなが馬の速さを称賛し、嬉しくなった君が、更に馬を速く走らせた結果、馬が死んでしまった。君は今『自由中国』の七版、八版の出版で喜んでいるが、全ては君がもたらした災害だ」と、強い口調で話した⁹¹。

これまでの言動から判断すると、胡適は『自由中国』を言論の自由を推進するための重要な刊行物と考えていたことがわかる。一方、「分化論」も「毀党論」も受け入れない蒋介石は反対党の結成を許容するとは考えにくい。このような状況で反対党を結成することの危険性が高すぎて、その影響は『自由中国』までに及ぶ可能性を胡適は考えただろう。反対党結成の推進は、言論の自由そのものに危機にもたらす可能性が高いという台湾の政治情勢は、確かに雷震が指摘したように、既に「八方塞がり」の状態になった。協力の姿勢を変えない胡適がこの状況でできることは、『自由中国』という言論の自由の最後の砦を守ることにほかならなかった。それゆえ、胡適は「馬の死」を懸念し、日々に激化する『自由中国』を抑えようとしなかった雷震を「馬を速く走らせた人」と呼び、『自由中国』の死という「災害」を警告した。

二ヶ月後、1960年4月24日の県市長及び省議員選挙における国民党の不正を討論するため、同年5月18日午後、台北の民社党本部で「在野党及び無党無派人士今期地方選挙検討会」が開催された。当初、参加者たちは地方選挙改革を議論したが、後半になると、論点の中心は反対党

に移り、最後、参加者たちは国民党に対抗する政党の結成を決意した。そして、雷震を含む核心メンバー 16 名によって「選挙改進座談会」が設立された⁹²。

1960 年 6 月 16 日、第二十二卷第二十期の『自由中国』最終号に「選挙改進座談会の声明」が発表された。声明ではまず、国民党が「民主憲政」を掲げながらも、実際には「反共」を大義名分にして独裁を敷いたと指摘し、国民党が党の利益を最優先し、国民の生活改善には無関心だと批判した。次に声明は、台湾で行われた地方選挙における国民党の不正行為の実例を挙げて批判し、座談会は今後の地方選挙において非国民党籍の候補者を全力で支持する方針を打ち出し、「地方自治は民主政治の基礎であり、地方選挙はまた地方自治の基礎である」と強調した。最後に「新たな政党を結成し、真の反共と真の民主のために奮闘し、一党独裁の状況を永遠に中国から絶滅させる」との目標を掲げ、反対党結成の決意を表明した⁹³。

声明が発表された二週間後の 1960 年 6 月 30 日に雷震が胡適を訪ね、新政党への支持を求めた際、胡適は「私を武器として扱わないでほしい。私は人と闘争したくない」、「仮に将来君らがしっかりとした反対党を結成したら、私は正式に公開で賛成できるが、決して君らの組織に参加しない。もちろん指導することもない」と伝えた⁹⁴。

その後、7 月 2 日に渡米する胡適のために送別会が開かれた。彼は再び反対党ではなく「在野党」という名称が適切だと述べた。在野党が強くなり、牽制役を果たし、平和的な方法で有権者の支持を得て、政治の新陳代謝をもたらすことを望んだ。最後に彼は「今は台湾しか残らず、ここに頼って中国大陆に戻りたいなら、これ以上政府の力を分散しないでほしい」と話した⁹⁵。

渡米後の 1960 年 8 月 4 日、胡適は書簡で雷震に「君たちの声明は攻撃的すぎた。結成前から既に国民党を打倒すると宣言し、国民党に対する憎悪を公言したら、国民党が君たちの党を承認しないのは当然のことである」、「私は丁重に勧告する。決して、私が台湾に帰るのを待って政党結成宣言を発表することはしないでほしい」と、反対党との距離を保とうとした。更に胡は、「君たちの政党結成宣言が発表されたとき、私はどのような態度を取るべきか、今は考えられない」、「私が君たちの考え方や方法をよく理解できないのと同じように、君も私の考え方や方法を理解できない。他人はなおさらだ」と、「君たち」、つまり雷震たちの反対党に対する不信と警戒心を示した⁹⁶。

しかし、反対党結成運動は 9 月 4 日の雷震逮捕によって中止された。副総統陳誠は当日、胡適に『自由中国』雑誌の最近の言論は公然と政府を否認し、動乱を煽った。調査は法律に従い、慎重に行う」と伝えた。そして胡適は当日に、「雷震の逮捕は、国内外に政府が反対党を弾圧したというイメージを与えることになる。もし『自由中国』が雷震の逮捕と共に停刊されるならば、政府は言論の自由を弾圧したという悪評を受けることになる」、「西洋の人々にとって、政府を批判し反対党を作ることは決して反乱ではない。雷震は反共愛国的な人間であることを私はよく知っている。もし反乱と断罪されたら、（筆者注：政府は）必ず世界中から笑われるだろう」、「軍事裁判ではなく、通常の司法裁判所に任せるべきだ」と述べ、雷震を庇い、逮捕に対する懸念を示した⁹⁷。

反対党に対する政府の措置は胡適の懸念した通りであった。実際、雷震逮捕前の『自由中国』

は何度も国民党批判を行ったため、蔣介石と国民党内は同誌に大きな不満を抱えた。しかし反対党結成が本格化するまで、政府は同誌の活動禁止に踏み切ることはなかった。

そして、1960年10月3日に軍事裁判が行われ、雷震は「共産党工作員の隠蔽」という罪で有罪判決を受け、懲役10年が宣告された⁹⁸。10月23日、胡適が帰国した翌日、彼は自宅で知人と昼食をとる際、胡頌平に「最近、台湾の友人たちもこの問題（筆者注：雷震事件）を議論している。彼らによると、仮に先生が雷震を助けたいのであれば、恐らく少し待たなければならない。今の状況では、何を言ってもあまり効果がないだろう」と伝えられた。そして胡適は「私はいつ雷震を救うと言ったか。私が救おうとしているのは雷震ではなく、中華民国だ。私は、国の面子を保つべきだと思う」と返答した⁹⁹。また、当日の夜には記者に対しても「雷震ではなく、私は国を助けたかった。国の声望は、既に雷震の事件によって損なわれた」と話した¹⁰⁰。

明らかに、胡適が重視したのは雷震逮捕によって失われた「民意と自由世界の支持」を如何に挽回することであり、雷震を救い出すことは二の次だった。

1960年11月18日、雷震に対する再審が進む中、胡適は蔣介石に呼ばれ、一時間半ほどの面会を行い、胡適はその詳細を日記に記録した。蔣介石が胡適に世界中の政治情勢について尋ねた後、胡適は「本来、張群には『総統に会いに行っても雷震の件は話さない』と言ったが、総統が国際情勢について尋ねてきた今、私はこの三ヶ月間、雷震に対する政府の措置は海外で非常に悪い反応を招いたことを指摘せざるを得ない」、「これほど重大な裁判が、わずか八時間半で終わった。これのどこが裁判と言えるのか」、「双十節の日、私はプリンストン大学に身を隠し、どの晩餐会にも行く勇気がなかった。なぜなら、私は全く顔を向けて人に会うことができなかったからだ」と、不満と哀愁の気持ちを伝えた¹⁰¹。

すると、蔣介石は胡適に対して「君と私はずっと良い関係を築いてきた。しかし、ここ一、二年の君は雷震だけを信じ、私たち政府を信用していないように見える」と述べた。それに対し、胡適は「その言葉はあまりにも重すぎる。私には耐えられない。私は常に雷震に忠告していた」と反論し、「十一年前、私は『道義をもって蔣総統の政府を支持する』と言ったが、この考えは今でも変わっていない。なぜなら、この政府を支持しなければ、他にどの政府を支持すればよいのか。この政府が潰れたら、私たちはどこへ行けばよいのか。この言葉を、私は雷震に何度も伝えた」と、自分は終始協力を一貫してきたことを話した¹⁰²。

最後に胡適は「十年前、仮に私が政党を作りたいと思えば、総統は反対せずに私を支持すると言ってくれた。それは、総統自身も、私は党を作らないとわかっていたからだろう。私は今でも総統の雅量を忘れていない。なら今日の総統も国民党の方も、十年前の私に示したあの雅量を、今少しでも新政党を作ろうとする人たちに分け与えてはもらえないだろうか」と言い、蔣介石に雷震に対する「容忍」を求めた¹⁰³。

そして、1960年11月24日に裁判所が雷震への原判決を維持することを知った胡適は、「とてもがっかりだ」、「国にとってこれは大きな損失だ」と嘆いた¹⁰⁴。こうして、1950年代の台湾における自由主義を代表し、胡適に言論の自由の最後の砦とされた『自由中国』は、編集者雷震の投獄と共に刊行停止となった。

第3節 「協力の中の反抗」の限界と意義

1960年、1961年度の院士選出のため、1962年2月24日に中央研究院の蔡元培館で第5回院士会議が開催された。主催者である胡適は晩餐会で「海外から帰国した皆さんよ。自由中国には確実に言論と思想の自由がある。皆さんは立法院、監察院、省議会を見学してもよい。立法院には新しい議場が建てられ、そこにいる委員たちは意見を発表し、政府を批判し、十分に自由中国の言論の自由を表した。監察院は古い建物にあり、年寄りの方々はそこで集まって共に討論と批判を行い、非常に自由なのだ。あと省議会を、あと台湾にある約二百種の雑誌を、皆さんも見てみてください。これらの雑誌は、私たちの言論の自由を表している」と、若干高揚した感情で語った。しかし、これが胡適の最後の言葉となり、晩餐会の後、彼は心臓発作で逝去した¹⁰⁵。

胡適の死に対し、当時の悲しむ人々もいたが、日本で活動していた台湾独立派雑誌『台湾青年』が1961年に掲載した「胡適論」では、胡適は「高等華人」と呼ばれ、「台湾人を抑圧した国民党政権の一員と変わらない」と評価された¹⁰⁶。

この評価は、本稿が整理した胡適を批判した先行研究の「源流」と位置づけられると筆者は考える。独裁に苦しむ者たちは、高い社会的地位を持ちながらも、蒋介石の独裁と戦わなかった胡適に対して肯定的な評価を下すことはないであろう。しかし前述のように、筆者は戦うか戦わないかという二分法でなく、独裁政治の下で様々な形で活動した知識人の在り方という視点をとった。戦うことも、戦わなかったことも、その幅広い選択肢の一つに過ぎず、胡適は他の道、即ち「協力の中の反抗」を選んだに過ぎなかった。

胡適は蒋介石に対する協力の姿勢を一貫したが、その中でも若干の反抗が見て取れる。しかし張君勱、呉国楨、雷震の反抗と異なり、蒋介石の統治方式を自由と民主に向けて改善する提案を行うという体制内改革に留まった胡適の反抗の烈度は限られた。胡適が常に強調した平和的、漸進的改革という温和的な姿勢は、米英の民主主義への追求から由来したと考えられるが、これは彼の反抗を制限した要因になったと指摘せざるを得ない。

本稿が示したように、胡適は終始、蒋介石政権を打倒しようとはせず、政権の方針に対して異議を唱えただけであった。その一方で、他の知識人には政権を擁護する姿勢を求めた。その理由は、胡適は反共を最優先にしたからだと筆者は考える。台湾移転後の中華民国にとって、自由民主化（憲政体制）と反共は「法統」を支える二大要素でもあり、解決すべき課題でもあった。そこで胡適は自由民主化を長期的な課題と捉え、反共を短期的な課題として優先にしたと筆者は考える。

なぜなら、胡適が話した「この政府が潰れたら、私たちはどこへ行けばよいのか」が示したように、中華民国が存在する限り、自由と民主の実現は将来的に可能であるが、仮に中華人民共和国が中華民国を消滅させることに成功すれば、自由と民主の可能性も完全に消滅してしまうからだ。それゆえ、胡適は「今日の政論家が持つべき態度」で「東風且伴薔薇住、到薔薇春已堪憐」を書き留めて、今でもすぐに薔薇を咲かせたい雷震に在野党を提案し、「政府の力を分散させないでほしい」と伝えた。

なお胡適の「協力の中の反抗」という実践が効果を上げなかった理由について、筆者は恐らくその原因は胡適自身にあるのではなく、時代背景と彼以外の人物にあると考える。自由、民主、反共を代表する理想的な国家像である「自由中国」、即ち中華民国を支持した胡適は、その現実的な選択肢として、与党である国民党及びその指導者である蔣介石に協力した。民主化改革に対する関心を基に、彼は蔣介石に「分化論」を提案したが、改造後、胡適は自由の促進を目指して「千人諍臣」と「毀党論」に転じ、言論の自由を促進させる媒体を守るため、『自由中国』の存続に尽力した。

しかし、蔣介石は胡適が期待した民主化を推進せず、『自由中国』も雷震らの敢行によって刊行停止となった。胡適の「協力の中の反抗」の限界は、民主化改革を進めなかった蔣介石と、反対党結成に転じた『自由中国』にあったのではないだろうか。

とはいえ、筆者は胡適の実践が無意味であったわけではないと考える。胡適が構想した「権力者による民主化改革」及び「政論雑誌を通じた自由の促進」は、彼の生前には実現しなかったが、台湾の民主化の過程は、まさに胡適の理念と一致するものであったと言える。周知のように、台湾民主化は「静かな革命」と称されている。これは、他国の民主化過程と比較して、台湾は大規模な流血や革命による政権転覆、外国の介入、クーデターを経験せず、憲法改正と国会改革を通じて民主化を達成したことを指す。

もちろん、自由と民主は独裁者の恩恵ではない。その実現には、国民に対して自由と民主を唱え、啓蒙的な役割を果たす知識人の存在と、独裁政権と対峙する反対派勢力の活動が不可欠である。自由と民主の到来は時間の問題であると考えられるが、その過程でどれほどの犠牲を払うことになるかは、権力者の決断によると考えられる。

「最後の独裁者」と称される蔣経国及び「リトル・ストロングマン」と呼ばれる李登輝の決断がなければ、台湾の民主化は「静かな革命」として達成されることはなかったと考えられる。体制内改革を実行したこれらの指導者こそ、胡適が求めていた人物像に他ならないのではないだろうか。本稿で整理・分析した胡適の「協力の中の反抗」という実践を踏まえると、胡適は体制内改革の先駆者として位置づけることができるのではないか。更に、権力者の自制によって達成された台湾の「静かな革命」と称される民主化の過程は、胡適が追求した自由民主化の道は現実的に実現可能であることを示したものと解釈できるのではないだろうか。

おわりに

本稿は先行研究を踏まえ、胡適に関する史料を用いて、「協力の中の反抗」という視点から「胡適生前の主張及び実践」を分析し、戦後胡適の自由主義を再考した。終戦以降、胡適は「独立した知識人」として活動したかったが、ソ連の脅威を感じ、中華民国の危機に直面した彼は、自由主義者、民主主義者、中国人、影響力のある知識人という複数の側面から国民党政権を支持し、蔣介石に対する協力を始めた。

蔣介石に協力することを決意した後、胡適は国民党内部からの民主化改革を期待し、蔣介石に

「分化論」を提言した一方、蔣介石を支持しない張君勱と呉国楨に否定的な態度をとった。そして蔣介石が国民党改造を推進させた後、胡適の関心は民主化から自由の促進に転じ、「千人諍臣」と「毀党論」を主張し始めた。同時に彼は『自由中国』を言論の自由の最後の拠点と理解し、同誌が徐々に国民党と対抗する反対党の結成を推進する中、反対党結成は同誌の刊行停止を招きかねないと警告するため、何度も雷震たちに「在野党」を提案し、反対党結成の勢いを抑えたかった。しかし雷震の投獄により、胡適が守ろうとした『自由中国』は二度と活動できなくなった。

胡適の「協力の中の反抗」とは、即ち「独裁政権下における体制内改革の試み」である。しかし、この姿勢は逆に彼の反抗を制約した。更に、蔣介石が民主化改革を実施しなかったことに加え、『自由中国』が反対党結成へと転じたことにより、胡適が構想した民主化と自由化の道は限界を迎えた。胡適の構想は彼の生前において実現には至らなかったものの、後の台湾で達成された「静かな革命」と呼ばれる民主化は、彼が目指した自由民主化の道は現実的に実現可能であることを示した。この点において、本稿は胡適を体制内改革の先駆者として位置づけることができると示唆した。

注

- 1 本稿での「戦後」とは第二次世界大戦終戦後、即ち日本の降伏文書が戦艦ミズーリで調印された1945年9月2日以降の時代である。
- 2 ジェローム・グリーダー著、佐藤公彦訳『胡適 1891-1962——中国革命の中のリベラリズム——』東京、藤原書店、2018年、557頁。英文原著は1970年に刊行。
- 3 同上書、430-431頁。
- 4 1946年11月22日から25日に南京で開かれた中華民国憲法制定のための会議である。李新総主編、中国社会科学院近代史研究所中華民国史研究室編『中華民国史 第十一卷』北京、中華書局、2011年、515-543頁。
- 5 共産党の統治を拒否する知識人たちが「民主反共」を掲げて1949年11月に台北で創刊した政論雑誌、同誌は1950年代の台湾での自由主義の代表と見なされる。薛化元『《自由中国》與民主憲政——1950年代台灣思想史的一個考察——』台北縣、稻鄉出版社、1996年、3-4頁。
- 6 Toleranceの翻訳に関して、胡適が使った中国語訳にあたる「容忍」は「我慢、辛抱して許す、耐え忍ぶ」という意味を持ち、日本語訳の「寛容、容認」とニュアンスが違うため、本稿は「容忍」を使う。詳しくは佐藤公彦編訳『胡適 政治・学問論集』東京、汲古書院、2022年、274頁を参照。
- 7 金恆煒『面對獨裁——胡適與殷海光的兩種態度——』台北、允晨文化實業公司、2023年、575-578頁。初版は2017年に刊行。
- 8 周質平「胡適光焰不熄」、潘光哲編『胡適與現代中國的理想追尋——紀念胡適先生120歲誕辰國際學術研討會論文集——』台北、秀威資訊科技公司、2013年、262-269頁。
- 9 陳儀深「胡適與蔣介石」、周策縱ほか『胡適與近代中國』台北、時報文化出版公司、1991年、106-107頁、陳三井「乘桴浮於海——論1949年胡適的抉擇——」、前掲『胡適與現代中國的理想追尋』、50-73頁、江勇振『【捨我其誰——胡適——】第四部 國師策士 1932-1962』新北、聯經出版事業公司、2018年、金恆煒、前掲『面對獨裁』。
- 10 江勇振、同上書、720、747、802頁。
- 11 金恆煒、前掲『面對獨裁』、578頁。殷海光（1919-1969）は五四運動世代の次の世代の知識人であり、反伝統主義に基づいて近代西洋化論を提唱し、満州事変以降は蔣介石を支持するようになった。なお1946年より蔣介石政府に対する失望によって独裁の限界を感じ、自由主義の理念を探り始めて、後ほど台湾に移住し、『自由中国』で文化・政治に関する文章を多く執筆した。中村元哉『中国、香港、台湾におけるリベラリズムの系譜』東京、有志舎、2018年、120-123頁を参照。
- 12 傅正編『雷震全集 37 獄中十年（二）（雷震日記）』台北、桂冠圖書公司、1989年、43-45頁。
- 13 呂芳上編『蔣中正先生年譜長編 第十一冊』台北、国史館、2015年、542頁。原載：「蔣中正日記」（未刊本）、1962年3月3日。

- 14 潘光哲編『胡適全集 胡適時論集 6』台北、中研院近史所、2018 年、153 頁。原載：「自由主義是什麼？」『周論』第二卷第四期、1948 年 8 月 6 日、頁不明。
- 15 楊金榮『角色与命運——胡適晚年的自由主義困境——』北京、三聯書店、2003 年、汪榮祖「當胡適遇到蔣介石——論自由主義的挫折——」、前掲『胡適與現代中國的理想追尋』、24-49 頁、余英時『重尋胡適歷程——胡適生平與思想再認識——（增訂版）』新北、聯經出版事業公司、2014 年、任育德『胡適晚年學思與行止研究（1948-1962）』新北、稻鄉出版社、2018 年。
- 16 余英時、前掲『重尋胡適歷程』、155-156 頁。
- 17 陳儀深「胡適與蔣介石」、周策縱ほか、前掲『胡適與近代中國』、97-112 頁、張耀杰『胡適評議 卷三 胡適與蔣介石之憲政博弈』台北、秀威資訊科技公司、2018 年、陳奎德『自由中國譜系』台北、匠心文化創意公司、2022 年、110-129 頁、黃克武『胡適的頓挫——自由與威權衝撞下的政治抉擇——』新北、台灣商務印書館公司、2021 年、黃克武『蔣經國與胡適——從「一黨專政」與「自由民主」的激盪看中華民國在臺灣的政治轉型——』『國史館館刊』第七十六期、2023 年 6 月、105-164 頁。
- 18 黃克武、前掲「蔣經國與胡適」、156-157 頁。
- 19 同上書、41-42 頁。原載：「胡適致張慰慈函」、1926 年 7 月 31 日。
- 20 潘光哲編『胡適全集 胡適中文書信集 2』台北、中研院近史所、2018 年、50 頁。原載：「胡適致徐志摩函」、1926 年 10 月 4 日。
- 21 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第五冊』新北、聯經出版事業公司、2020 年、1729-1739 頁。原載：『The Annals of the American Academy of Political and Social Science』, Vol. 218, November, 1941, pp.26-36. Dayton.
- 22 李新總主編、前掲『中華民國史 第十一卷』、515-543 頁。
- 23 潘光哲編『胡適全集 胡適中文書信集 3』台北、中研院近史所、2018 年、557-558 頁。原載：「胡適至傅斯年函」、1947 年 2 月 6 日。
- 24 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 3』、563 頁。原載：「胡適至王世杰函」、1947 年 2 月 22 日。
- 25 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 3』、565-567 頁。原載：「胡適至王世杰函」、1947 年 3 月 20 日。
- 26 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適時論集 6』、71-73 頁。原載：胡適「眼前『兩個世界』的明朗化」『獨立時論』第一集、1948 年、15-16 頁。
- 27 同上書、74-81 頁。原載：胡適「青年人的苦悶」『獨立時論』第一集、1948 年、51-53 頁。
- 28 同上書、85-90 頁。原載：胡適「眼前世界文化的趨向」『華北日報』、1947 年 8 月 3 日。
- 29 同上書、91-94 頁。原載：胡適「我們必須選擇我們的方向」『獨立時論集』、1948 年、107-108 頁。
- 30 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 3』、661-664 頁。原載：「胡適至周鯁生函」、1948 年 1 月 21 日。
- 31 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第六冊』新北、聯經出版事業公司、2020 年、2063 頁。
- 32 同上書、2065 頁。
- 33 同上。
- 34 ジェローム・グリーダー、前掲『胡適 1891-1962』、426 頁
- 35 同上。
- 36 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第六冊』、2065-2066 頁。
- 37 呂芳上・源流成編『蔣中正日記（1949 年）』台北、國史館、2023 年、22 頁。
- 38 胡適著、曹伯言整理『胡適日記全集（二版）第八冊』新北、聯經出版事業公司、2018 年、376 頁。
- 39 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第六冊』、2082 頁。
- 40 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 3』、785-786 頁。原載：「胡適至蔣介石函」、1949 年 5 月 11 日。
- 41 呂芳上編『蔣中正先生年譜長編 第九冊』台北、國史館、2015 年、288 頁。原載：「蔣中正復胡適函」（民國 38 年 5 月 28 日）、《蔣中正總統文物》、典藏号：002-020400-00043-039。
- 42 潘光哲編『胡適全集 胡適中文書信集 4』台北、中研院近史所、2018 年、62 頁。原載：「胡適至蔣介石函」、1951 年 5 月 31 日。
- 43 同上書、61-62 頁。
- 44 同上書、62 頁。
- 45 同上書、63 頁
- 46 張君勱は 1946 年に政協會議において、各党派が異議なく受け入れた中華民國憲法の起草を主導したため、「中華民國憲法の生みの親」と言われる。中村元哉、前掲書、91 頁。
- 47 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第六冊』、2226 頁。原載：『中央日報』、1952 年 11 月 11 日。
- 48 同上書、2228 頁。原載：『胡適言論集』、乙編。
- 49 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 4』、96-99 頁。原載：「胡適至蔣介石函」、1952 年 9 月 15 日。

- 50 呂芳上編『蔣中正先生年譜長編 第十冊』台北、国史館、2015年、102頁。原載：「蔣中正日記」（未刊本）、1951年9月23日。
- 51 「改造」の過程は、松田康博『台湾における一党独裁体制の成立』東京、慶応義塾大学出版会、2006年、54-106頁を参照。
- 52 呂芳上・源流成編『蔣中正日記（1953年）』台北、国史館、2023年、30頁。また「諍友（諍臣）」とは、自分（君主）が誤った行動をした際に、率直に批判的な意見を言う友人（大臣）である。
- 53 胡適著、曹伯言整理『胡適日記全集（二版）第九冊』新北、聯經出版事業公司、2018年、3頁。
- 54 彭明敏『自由的滋味——彭明敏回憶錄——』台北、台灣文藝出版社、1987年、1-2頁。
- 55 同上書、80頁。
- 56 同上書、91頁。
- 57 同上書、109頁。
- 58 同上書、91頁。
- 59 薛化元、前掲『《自由中國》與民主憲政』、121頁。
- 60 茅家琦ほか『中国国民党史（下）』南京、江蘇人民出版社、2018年、57、60-62頁。
- 61 呂芳上編、前掲『蔣中正先生年譜長編 第十冊』、299、304-305頁。
- 62 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第七冊』新北、聯經出版事業公司、2020年、2380頁。
- 63 吳国楨と胡適の筆戦を英語原文の史料を用いて詳しく分析した研究は金恆煒、前掲書、21-144頁を参照。
- 64 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第七冊』、2432-2435頁。原載：『春秋雜誌』第二一卷第二期、1974年8月1日。
- 65 呂芳上編、前掲『蔣中正先生年譜長編 第十冊』、361頁。
- 66 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第七冊』、2361頁。原載：『中央日報』紐約九日航訊、1954年2月16日。
- 67 同上書、2421頁。原載：『中央日報』一版、1954年4月7日。
- 68 茅家琦ほか、前掲『中国国民党史（下）』、67-68頁。
- 69 傅正編『雷震全集 35 第一個十年（五）（雷震日記）』台北、桂冠圖書公司、1990年、244頁。
- 70 雷震の米国訪問が制限された経緯は薛化元『雷震與 1950年代台灣政治發展——轉型正義的視角——』台北、中正紀念堂、2019年、160-177頁を参照。
- 71 薛化元、前掲『《自由中國》與民主憲政』、121頁。
- 72 范泓『民主的銅像——雷震傳——』台北、獨立作家、2013年、212-214頁。
- 73 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 4』、227頁。原載：「胡適至張羣函」、1955年1月26日。
- 74 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第七冊』、2572-2573頁。原載：賴景瑚「憶胡適之先生」『中外雜誌』一三卷四期、1973年4月。
- 75 呂芳上編、前掲『蔣中正先生年譜長編 第十冊』、650頁。原載：「蔣中正日記」（未刊本）、1957年1月8、9日。
- 76 高麗鵬編註、潘光哲校閱『萬山不許一溪奔——胡適雷震來往書信選集——』台北、中研院近史所、2001年、98-101。
- 77 同上書、102-104、106-110頁。
- 78 同上書、116-117頁。
- 79 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第七冊』、2655-2656頁。原載：『聯合報』、1958年4月9日。
- 80 同上書、2702-2704頁。原載：『自由中國』第十八卷第十一期、1958年6月1日。
- 81 同上書、2705頁。
- 82 同上書、2706-2707頁。
- 83 こうした見解を持つ研究は、范泓、前掲書、292頁、任育德『胡適晚年學思與行止研究（1948-1962）』新北、稻鄉出版社、2018年、194頁、薛化元『民主的浪漫之路——雷震傳——』台北、遠流、2020年、337頁がある。
- 84 潘光哲編『胡適全集 胡適時論集 8』台北、中研院近史所、2018年、148頁。原載：胡適「今日政論家應有的態度」、1959年、館藏号：HS-NK05-187-015、胡適檔案檢索系統『南港档』
- 85 傅正主編『雷震全集 40 第一個十年（八）（雷震日記）』台北、桂冠圖書公司、1990年、31頁。
- 86 胡適「容忍與自由」『自由中國』第二十卷第六期、1959年3月16日、7-8頁。
- 87 殷海光「胡適論『容忍與自由』讀後」『自由中國』第二十卷第七期、1959年3月16日、15-16頁。
- 88 黃克武、前掲書、387-388頁。總統三選をめぐる蔣介石、陳誠、胡適の対応及び態度の変化は同上書、289-390頁を参照。
- 89 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第八冊』新北、聯經出版事業公司、2020年、3062-3068頁。原載：

- 『自由中国』第二一卷第一期。
- 90 潘光哲編『胡適全集 胡適中文書信集 5』台北、中研院近史所、2018 年、227 頁。
- 91 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第九冊』新北、聯經出版事業公司、2020 年、3217 頁。
- 92 蘇瑞鏘『戰後臺灣組黨運動的濫觴——「中國民主黨」組黨運動——』台北県、稻郷出版社、2005 年、88-90、104-110 頁。
- 93 選舉改進座談會「選舉改進座談會的聲明」『自由中国』第二十二卷第十二期、1960 年 6 月 16 日、18 頁。
- 94 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第九冊』、2020 年、3305-3306 頁。
- 95 同上書、3309-3310 頁。
- 96 潘光哲編、前掲『胡適全集 胡適中文書信集 5』、296-297 頁。原載：「胡適至雷震函」、1960 年 8 月 4 日。
- 97 前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第九冊』、3334-3335 頁
- 98 蘇瑞鏘、前掲書、161-164 頁。
- 99 胡頌平編『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第十一冊』新北、聯經出版事業公司、2020 年、284-285 頁。
- 100 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第九冊』、3345 頁。
- 101 胡適著、曹伯言整理、前掲『胡適日記全集（二版）第九冊』、665-667 頁。
- 102 同上書、667-668 頁。
- 103 同上書、668-669 頁
- 104 胡頌平編、前掲『胡適之先生年譜長編初稿（二版）第九冊』、3385 頁。
- 105 同上書、3901-3902 頁
- 106 鄭飛竜「胡適論」台湾青年編集委員会編『台湾青年』第七号、東京、台湾青年社、1961 年、13-20 頁。

(2024 年 9 月 5 日投稿受理、2025 年 4 月 2 日採用決定)